



以心守
乾

中村俊定文庫
文庫 18
614
1



先... 月... 宜... 宜... 宜...
在... 宜... 宜... 宜... 宜...
宜... 宜... 宜... 宜... 宜...
宜... 宜... 宜... 宜... 宜...

白... 有... 介... 仁...

... 宜... 宜... 宜... 宜... 宜...



大清乾隆歲次
己巳四月 穀旦

御徒身

御徒身

13

山

姑蘓沈中亭



14

右應千古羅人翁之需大清草亭沈氏書
於崎陽客館所贈之扁字也所記乾隆
己巳之歲者實本邦寬延二年也

叙



右 活 船 山 翁 翁 人 家 祖 山 在
富 長 之 送 遊 船 之 和 語 也 傳
京 之 事 一 也 之 事 也 也 西 文
真 本 之 紙 紙 之 稟 紙 也 也 紙
也 真 印 也 也 也 也 也 也 也
之 一 也 也 也 也 也 也 也 也
半 也 也 也 也 也 也 也 也

十日國々々々々々々々々々々々
揮を絶々々々々々々々々々々々
控し何の原のを公の
し何の原のを公の
あやう集々に跡々々々々々
汗便とあうり何々々々々々
白々々名浪を今浪々牛行
六婦し々々を掉をう々々々

あのみまもあうり何々々々
あやう又純日く々々々々々
まま々々々々々々々々々々
あやう又純日く々々々々々
し何の原のを公の
あやう又純日く々々々々々
三何の原のを公の
あやう又純日く々々々々々
あやう又純日く々々々々々

夏雨の川を過るはくさくさ
 とくさくさくさくさくさくさ
 雨を申つるまじり雨梨

静坐百五十の

其御店

杜白蓮法



羅六

青柳やをの池の

ぬ

たまらぬ
 六六三三



見ろくわつちや 神のち
 若船も多分も流るれも
 言ふに時々の舟も
 二三柳月の舟を川隈の
 白くさくさくさくさ

牛行
 杜口
 合
 行
 執事

肩衣ウ又ウ袴ウ着ウるウ新田ウ太
 何ウ素ウのウ子ウヲウ籠ウ抱ウくウ形ウ
 赤ウいウきウきウんウ色ウ絡ウくウ山ウ城ウへ
 袴ウもウ履ウあウくウいウきウんウ山
 穀ウ焙ウくウるウ寅ウのウ一ウ天
 えウすウぬウはウぬウ比ウのウ呼ウぶウも
 ちウのウ法ウはウ乃ウ何ウのウ法ウ也ウ
 行ウ口ウ行ウ、ウ行ウ口ウ行ウ口ウ行ウ口ウ

妻ウのウ膚ウぬウやウうウまウんウり
 都ウ使ウりウ母ウ床ウまウてウ終ウ入
 二
 時ウ守ウよウ佛ウのウ名ウハウ思ウりウ也
 女ウのウ書ウ写ウ乃ウ志ウ字ウのウ誤ウ
 ちウきウきウはウ麦ウ茶ウのウ書ウりウなウんウも
 吉ウ田ウのウ幕ウハウひウくウにウ終ウりウくウ
 心ウりウぬウるウはウ能ウをウ思ウひウのウ事ウ也ウ
 あウをウらウぬウくウのウ鯨ウ吐ウくウや
 雪ウのウ長ウ守ウくウきウものウとウあウらウるウを
 けウくウくウまウらウるウ身ウノウ八ウ分ウ也ウ
 行ウ口ウ行ウ口ウ行ウ口ウ行ウ口ウ

己く方をうけや流し又碓利社
跡の異名共砂子峰 浮
神社の神月結まおあし
西の風う炬を 消く
半書も片紙紙も社儀を
板寄屋大工のあまをて板
栗平の儀分のうまの記の書
ちつとさきと名山年一各所 文ッを
花つきと儀や 異月之千二
信書名の儀乃方りし草

行合口合行合口合

牙吉のひ、只優るふかきとあつらん
みくきとみといふ一くうり云つらん
ぬらたはあ歳ふか又あを思ふを
を本らふらやふくみ耳くあ彼乃
韓退之の字もをさく岩から
めやと足けあふふつきたるを
かどしを並へて服をつらふや

川を流せ蚊まかしく海一蚊をのほ
あつらふところの風さるうち
松柏界つせはひひとりく

中畧

よきとくふまやむうの花のま
日今加が筆つうかゝる 顔

羅人 杜口 和流 鳥門 牛

追善

舟よるよ目のあはれをとき秋

和流

小車の花化すもぬ轍のま

三角

付や三斗の月乃照然り

蟻文

つゆもあつる乃かきま

其嶋菴
杜口

こゝろはきん

いふやちちりて羅月既平しとみ
東都一旗立ちすりありや、ゆきぬ乃
白ありや、ぬを捨てて今うらま
賜をうけ、遠く佳事一を思ふ

羅人

武士ろ佳話ありきや江戸のま

雲の奴も箱入り此故

杜口

別立の片名やき赤くぬこく

三角

春のまはりとなりしや、まはる成り

風外

まはるはわく隈あ、月をこぼ

春海

夕学あ松乃秋ま、ぬを

蟻文

何れも 西山 梅のたき信を
 夏の一しちうか恋りの約
 時のらう月こぢき水鏡の中
 鴨上戸 夕夕あさし 極
 一しちこれ尻毛むきふの神子そ
 彭別りり 又 夢か 飯
 知者の海のものれとぬけり 乱髪
 立ふゆふ魚くも羽感堂形
 之よりのお前を振くむけり
 海さうきいかつく 長く 氷き
 北海 三ノ角 呂文 風外 蝓文 春海
 嶺外 川定 画掌 馬竜 批葉

故御前山翁三十三回忌

字胎ふは信や今ひの中は夢
 歩目の教ふも向ふ親言件 馬龍
 手くも信き信や 響出 嵐外
 年く夢くらふ信の身も入 画掌
 け及をさくふ人り物久
 経海さ中もさくふよ夢ノ 幽 春海

四季

白牡丹のよきときこそ一喜の多

風外

夢てり木のまや衣帯盤板

藍水

消るる虹の影をか粹のノ

呂文

物子と踏碎るるはるまじ

州定

追善

一葉や、流るる瓢箪の西にま

主秋

花の田のまの目のまのゆふ東
双梅の雲の影のまの遊梅

春之部

月を懐花よのまのまの向うか

野童

冬は宿乃春やまはる梅のど

佗山

今も秋のむう一四もやまはる

漣月

地もまの花や侍出言の机あ

何得

まを流をまのまのまの向う那

貴泉 丹州カノ山

よーや梅青の徳を白ひぬる

芦洲

並にまの彼なまのまの向う

薰好

世もまのまのまの谷汲れ花衣

南路 花更

多くをくまをぬくの香や栴林

嬰口

そとにありも種有じし栴林

斗雪

きつとや手向白さち草

栴之

散ゆきと栴き栴のきまのふ

玉淵

花の影を天おく手向の柳

記里

手向をや草のまを乃一栴

瀑布

明統のふん徳ゆかる彼岸を

一專

手向をや彼岸さくく此一枝

麥舟

花此岸のそやぬるや草の縁

寸砒

富吉川の流や永き月を白ふ

盡口

さふ店の上四つや 初まらく

百志

手向をや栴のふれ一ふ

茂林

浮射山の伊勢をわやく

彼岸とそ花を手向をを安ん

文誰

日序 秋と部

観音の栴白沙連手向多

鳳原

栴葉ううと近人手向玉糸

嘯山

吊夜の家切利天と揚灯籠

鴉江

渚をわくまに栴やみきま

春來

沙と流るる手向月やおの毛

祖旦

其の心は観音堂を子向屋

散りて人馬路のこまに柳

月や首及乃乃乃乃乃乃乃

補陀落や踊りうゝを新葉

今もも塚ももももももも

けは言先ハ後人観音神

持りてれよももももももも

秋の夜や名碑月眠る山

ゆ末ハ初葉ももももももも

世ももももももももももも

其指

五株

文波

倭泉

一光

蛾風

如行

蒼佳

輝風

守一

まふなる年々々々この天は

日又月又宵ぬるやふま容

たつ物やすきむれの中の家

乃其之乃其やはくえ乃乃乃

物形ハハヤヤヤヤヤヤヤ

月影ハ指ももももももも

ゆももももももももももも

そりて宝の心のかつる親

踊りもももももももももも

まもりれつ秋も向れく葉首

裸文

鯨文

文下

春芽

都名

祇口

箕舟

書龜

西行卷

正 壽照

浪花 十

追善

籠中の鳥	や	海	乃	の	又	其	梅
香燭のめくも	も	子	一	葉	の	徑	童
はくく	と	思	ハ	マ	の	賈	友
松	竹	や	今	夕	影	儻	山
辛	ら	の	ふ	人	山	負	也
一	床	く	ま	や	ま	來	之
め	く	ら	と	あ	て	も	も
短	冊	の	紙	本	積	て	や
						寄	銘

以月部 卯 酉 子 辰 戌 丑 未 寅 申 酉 戌 亥 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

目	を	は	花	の	む	え	く	東	山	牛	行
燈	を	照	く	花	仰	ん	る	御	く	た	琴

四季 發句

青 龜 拙 化

春 草 一 掃 一 掃 一 掃 一 掃
 袴 穿 く 心 の 厨 下 一 軒 一 軒
 雪 の 何 う 一 雪 一 雪 一 雪
 香 丸 の 神 一 心 一 心 一 心
 花 乃 牡丹 細 心 一 心 一 心
 心 一 心 一 心 一 心 一 心

石佛一格子の因乃釣物
 石佛のうしろ深や今如の秋
 畧行の遠る無き名の枝り柳
 ありきや水をさしめて塔の上
 今やささるおとらり医者の門
 山寺のや浮世くくもの片は戸

右十二句

雛をこそ梅は結をりまの月
 夕の海や浴に遠る古の藤
 言海の浪を動り雲の峰

大参
 録六
 着草

但馬大谷

有龍

人梅乃たらしき

あはれまのこ



七十一

あしひん

うしろ

あしひん

同大谷

芦角



但州和田村

董之

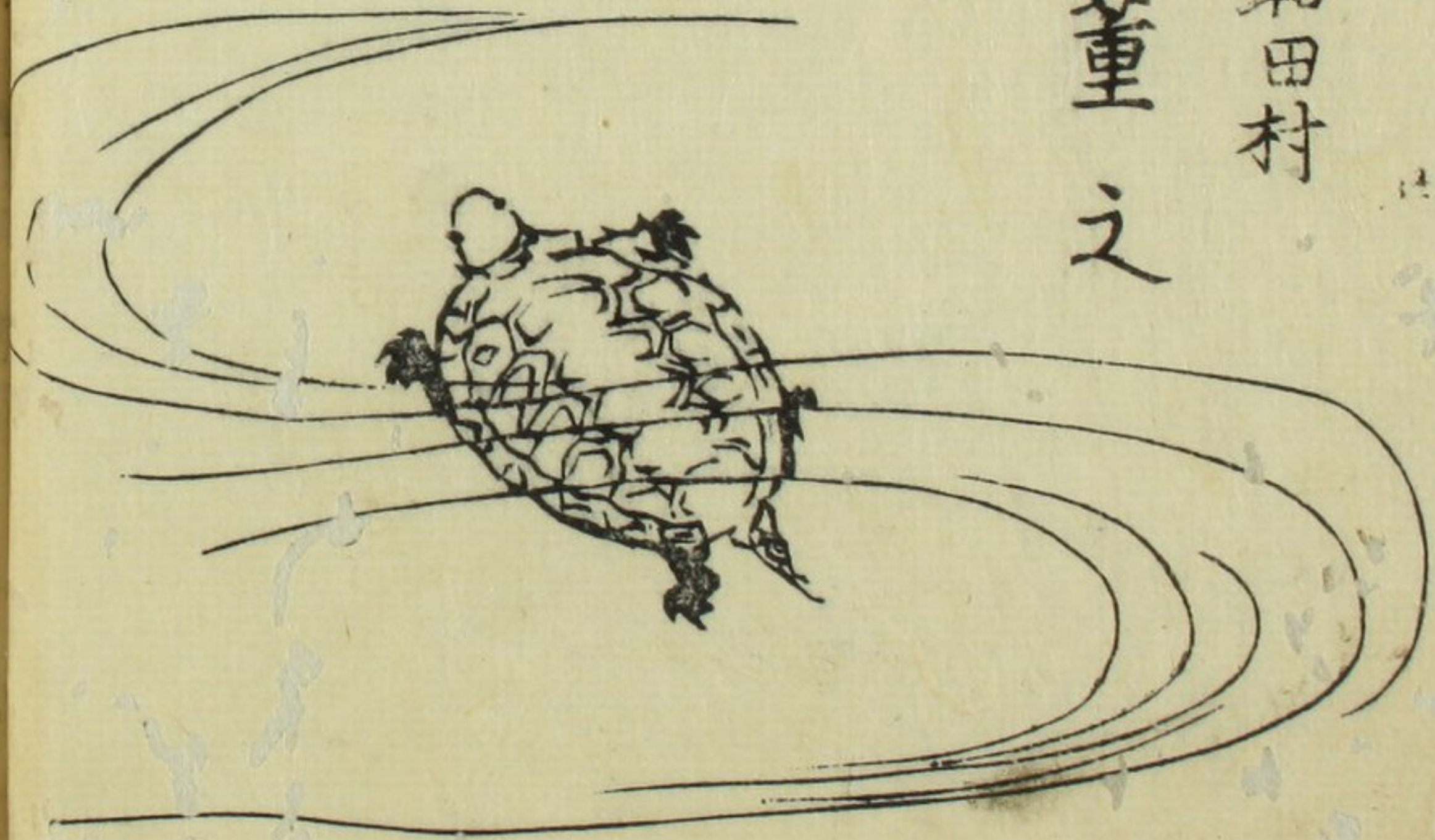
云の

あしひん

あしひん

あしひん

あしひん



つれくの折は事なく怪の多
をふは是より在里の小野
生は隆のくくめを恨みされ
つむいぬる冷きものよ蓋
考れまゝめ終りたりりり
啣しをうりハ世きくは愛
おあし隆をえよの物の月
蝸く映する年一のまま貝
ゆしく毛ぬねのめうをきて
くくくや飛くまきの夕暮

野童
圖牛
杜口
執筆
春來
其梢
夫可
文波
嘯山
蕙好

ニ
折るこの女は男は皆も
むしー母ふろふけのり湯
うさういふわの朝露乃言新
約するのぬき人柄
細い唇むくくする古やろ
神もまを原の葉子ゆて居る
帆程も本がししと散る風情も
原ちし顔ゆい遠空の山城へ
奥原き知識の奇なりやまろく
出っはうりまや芋のまふのる

祖旦
杜人
娥風
練石
杜口
唇原
圖牛
春來
文波
野臺

ふ抄の靴きかき人へを至の月

十

禿より〜 眠く虫 籠

手をおき後の月しむ袋棚

隣子よりつる山乃新あり

おんてもらんちい小倉多由也

とよれり〜まればあゆみたよ

百物り〜抱ぬ多抄室

其端

倭泉

丹州カメ山 斐泉

日所 全瓦

五妹

文誰

其梅

鴉江

奇仙

羅人

宮のりやを口の縁毛守り白

煙の多抄〜 付の 掃

枚窓〜 ねらふ神を引舞く

春は返るをほる 春の〜 進

今月のをま〜 掃り 進

夜を掃るを〜 掃り 夜

鏡〜 佛の相の 鮮き

一字も〜 入るの 鏡

祀旦

文波

賑心

春来

手指

且

幣串をたぶらふはなすし一舟のり
 ちんちんや焼火をくまん
 着るるるのやけうら散るるる
 縹色の指もまきの白き
 唐人様えつあつて水も
 階へあしして一色白く
 遠し舟やと投るる月の家
 ちんちんや焼火をくまん
 首のくまなく首のくまなく
 介のくまなく介のくまなく

波、指、末、正、上、

舟のり奥の舟のり
 二階の巨艦のり
 僧侶の庵はくまなく
 癖くまなく癖くまなく
 はくまなく癖くまなく
 お馬のぬの果ぬ靴
 考りて愛する神のり
 二の月ののり
 通るるるるるるる
 舟のり舟のり舟のり

波、指、末、上、

橋にけし、ゆきふりねりて
 ふりなりしを文之月より
 藤連のしらり流し捨つけく
 流さく、時々のほろり
 之依のまに別もなして
 大空の雲を車にけり
 西東をうねりて
 せ宗く、つれづれ

元、末、波、

追慕

丹州カノ山

敬くまてふも及の志るうか
 浅雨や香をきく斗散柳
 見ゆら、こゝろや、唯まら中のみ
 ころころと、おのころのこゝろ、格は、珍なる
 千音、振く、おの、格、座の、を、と、す、き
 沙々、おの、え、う、く、く、玉、を、み、り
 つ、難、う、を、を、を、追、く、名、を、響、ま
 十、三、墳、や、き、く、く、を、格、の、を、化、せ、置
 此、の、を、か、や、一、山、の、人、の、知、ま、ら、う

朝三
 一甫
 白花
 田車
 一鳳
 齊之
 求己
 古思
 五山

秋風 ねむるも月夜く

金紫小

名をたぬおを幾世の主人公

南好

追善の符を返す折うけし折うけ
堅く物やしもさあけくさうりまき
まてまかりうをさうりま

柳種やをくれかろく毛軽の声

貴泉

花咲菖蒲のなを弘めあひし
山口先生とのこし高き又抜き
つりちをさうりま

石州大田

末廣一草のむさくろの幅

江橋

古きおのちを忘るをさうりま

同所

文月を月日の忘れりうもさ

楚江

羽杖はくはるりま

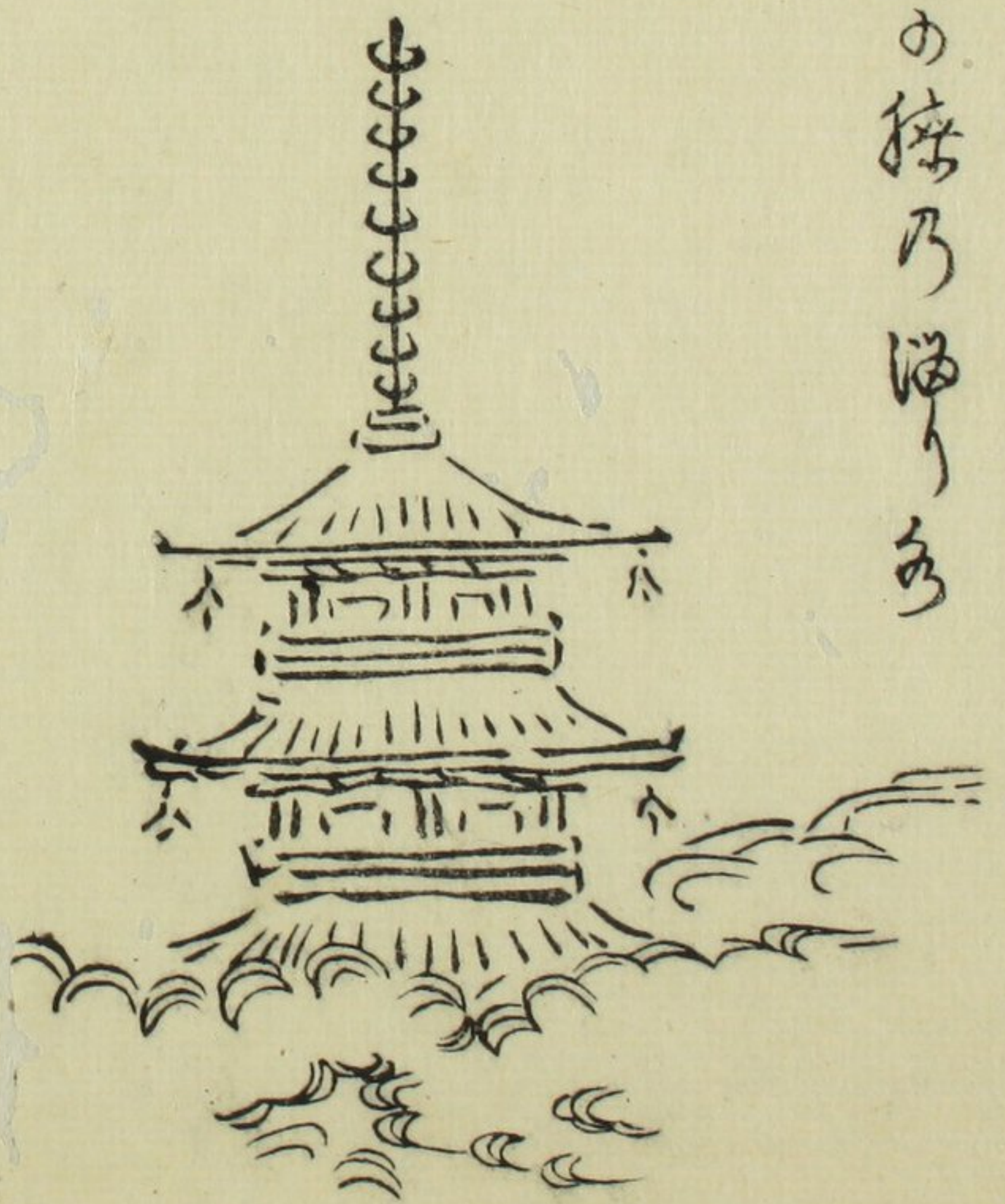
お夜



警中房

青亀

二月や佛の接乃海り多



奇仙

昔よりや聖の女乃印きく
笑ふくくゆきさしきも夏
詠そのさも時やうまゆり
吟くく色あを焙り
訓はあふ風もんむり自若
今へゆるる ちの持は果
喫養うらまあく名や流るん
他よのらまの用も手他ふ
四五百の条うあさう目を消し
浪乃とらふ心のも漏

羅女

牛行 寄銘
り 節 行 節
節

花柑 草奈のり上ノ敷き
 宇く〜 移るひの時ちりふ
 友目ある移るおれそ
 女〜 糸洲を渡る過占
 ちあまや餅さしの等を別を
 旭まをの鏡乃海舟
 向ふより見せ花を移る目
 妻ハ作らまき 谷の一家
 夢補の香は法書へ蝶の群あて
 被り笠のむら〜 思ひ

行 節 節 節 節 節 行

露もや〜 法夜の本をたぬ
 迹〜 籠る鼻く〜 鳴る
 えぬの事 袖ひ〜 内のまは
 乾晴 妻の 節 日の 節
 影れ〜 老のまらこふ鳥帽子親
 陶り 斤もよ 露 方〜 菊
 篁の奥も 月の 遊〜 く
 秋の 油へや 太鼓 寄 始
 唐僧の 乗 拂きと 打 掛
 少 奠の 終〜 下 法 の 妻 び

節 節 節 節 節 節 節 節

十
飯神の日記をまねの算集
雲霞うらむを棋石を影と
詠くしの雨の佳春を格子く
夷子蒼蒼著く駒の志ほじし
年歴くも替りぬむのふり草
古草下すしれよ一節の香

行 節 節 節 節

可憐

人をもたも香は白ふまの雲かうま
幾来もあむま終あめは 蝶
風勢日脚 せんまの空晴て
心を清くよ 流たりりりり
不字乃 光をめぐりすふ二の中
八字をなほ清くゆきほくす
持摺り 新をのさるる古 社
禱多尾毛く海まのく 数
叶りぬ又きりり乃 証ま

有 龍 芦 帆 芦 角 芦 潜 芦 舟 龍 角 帆

二
意の伎ハ目のしちう、すあ
うしうひの晴くまもとの奥きき
舟一割とくハ能とりの端
忠孝を言ふは身ハ不う、そ
うし抄う、月を晴きす
飄葉のまきさうらうさう、
ゆれハ向ふ甲斐と飛強の人
ゆきくと撰む橋の枝、ぬり
比叡あてく月一、やう、轉意
柴馬の流く、ある、知う、く、

舟 堤 帆 龍 舟 堤 角 龍 潜 舟

を及、ち、福、なる、達れ
る、旗、ハ、神、代、の、奴、と、名、り、ゆ
ま、の、ま、れ、さ、う、れ、ま、ま、あ、や
え、ゆ、ま、を、ぬ、め、り、ゆ、り、ま、ま、あ
あ、ま、ま、ゆ、ま、あ、ま、ま、の、ま、ま、あ
ね、ま、ま、ゆ、ま、の、ま、ま、あ、ま、ま
ゆ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま
百里あま、ま、ま、の、ま、ま、あ、ま、ま
今、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま
猿、猴、ハ、帽、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

角 箔 舟 龍 堤 角 箔 帆 堤 箔

二十坊

十ウ
おろしの女御身一送るし世終

散り押 喜する程のちうし

過る人 投げた雨

海鏡の俗医志ひりを切り

ひひりくを計りし思ふふ

まをの教へるあはく花の道

壁や捨る身 くらげふの山

帆

龍

堤

帆

角

潜

執業

歌仙

中唐や何うたうても版し

まもも完くも萩の戸乃屋

雲空より夕自のうららひて

見送りかうら 味 珍なり

服差の鞘をおまふのしり

隣 ちをまきふあ店つ朝

唄 訓きぬ小舟は白の音

ちや白くする北國の山

羅女

牛行

斗雲

嬰口

寸砂

執筆

呂給

百篇

皆あまの結言の極乃以教て
鶴音のこゝろ神やまき重
大名の人まきせはゆふまき
月の内しこむ新造のまき
夜ふまきおぼろのゆふまき
江よ激こくと新ゆふまき
欠落のゆふまきもまき
まきまきゆふまきのまき
振ふく神まきまき
ゆふまきまきまき

口 破 雪 節 鈴 破 雪 節 口

磨の結おまきまき
まきも破おまき 酒賣の歌
ゆふまきまきまきまき
ゆふまきまきまきまき
ちやまきまきまき
兵糧咽まきまき 難兵
奉納まきまきを社僧のおまき
まきまきまきまき 楠
雨暗し狸のまきまき廊下
まきまきまきまき

口 破 雪 節 鈴 破 雪 節 口

立待の月もなをみく掛香よ
 片しやれ夕夕をを騒うら取
 赤壁の山もあつとくもく
 故々のこととを回ふこととをさの
 氣散るま脊中へ回るは院袋
 濱やしとあふぬものハ使時
 樓へ流ししうけさる花の跡
 海もさのもあふま惜なり

砂合給合節合雪口

追善

ふふそそ多ちた然風となりこり

花中

四季混雜

雪ふみゆはうらや天の系

川内月ハ清くとなりり個はさ

琴強くをひくう歌くを窓の月

市柳窓の目みまおひり

今ををうら

接くくうおのま地や風葉

礼極し陸子ゆらや夏の

うら枯やいつの螢よのか車

掛もや風もり清き杉の雪

三

鯨丈

空川や車も音なく秋葉の
分生の露を帯ね松の梢より
砌りや唐土は家を訪るを
暮の音も立あられ又菊の花
遠うらむゆい 種を風を仙を
永き夜やう孫さめの奇れ文字餘
ま管のやうに折る脚躰をか
夕ちきさめくくぬくこ折る寺まか
親くま子の縁れく塔の取りりり
すつらう陸の猫乃も上りりり

一專

其淵

交ホ

悠子

魯牛

唱

奇仙

茂林独吟

神様と縁結び唐のまゝか
ちりもくもるも縁の茶も本
地車よかゝ蕪を種を種立て
伏のあゝゝゝ 唐くま傳
空の月曲・舞海の床りけ
たふれ唐のまゝひ棚ゝゝ
持ゆま縁のまゝを密いり
橋あゝゝゝゝゝゝゝゝ

本意はきく何をわろき長被
きり下けてるらんる下り
棋の音の止むく斜の音は
涼〜きり〜園 あり〜
今更よき〜し〜自画自讃
後仕りあり〜 思ひを連弾
約もよき〜きり〜し〜の
晴拂き 小き系流
きり〜し〜のきり〜のきり〜
きり〜し〜のきり〜のきり〜

二

短きも短きよきおの〜し〜
サるりちり〜 ありなま〜
浴衣子思御〜 雪の音
以候借〜 いと 也 翰
鞠查〜 今更〜 新ある
筆の音と 松吹を〜
ゆるんの茶〜 あり〜 鳴し
初〜 ぼり 夜お〜 見れ
おは〜 ぬ糸の袖乃〜
糸のちり〜 ありなま〜

お紅の窓倦くらゝはる
 彩繪の髻乃粧者古笑らせ
 ナウ
 あの床風おきく隠居の道代記
 智こめけさきやれ寝よんま
 舟燈 福よき世の隈 ちよ
 干飯のつくりなき世の笠
 花千日秘花の香を掛置に
 蝶よれハ 蝶よれハ 中庭

羅人翁三十三回の手紙をよむ
 言ひ下すしこまきりしりふハ
 志しきもつは勝たしるかしの
 笑うを慕ふよ

奇仙

丹州龜山

道遥窩

見ぬ人やまな月のかけり
 ときき白ひの葉あを うか上
 きりくをゆまあるうち彩こも
 立方つき拍ふぬけたり
 めんもぬく端ひもきく神教
 千名は花のまをる 多彦

全瓦
 貴泉
 言思
 求己
 田車
 白糸

133-34
7A



初列もあの和歌むくく

一風

太く打こ 鼻の恭平

一甫

泣きし癖の女乃 高き女

朝三

病も何足なく 園の菊人

求己

お母ののしる常を解き

南好

歌よりさくは 赤い赤い

金紫

詩もも折る回さ 蒼氣湯

全

晒布もつらむ 月の玉川

全

よふたつと名香のゆる 宿園の雨

全

言是の指の 花よいとハ

三出

夢のさあハ けぬえ光

齊之

引あとちろく 金の凡中

一風

花よ 誇れハ 人々 惜り家

白花

叫よ ああハ 口を 切され果

田車

舟ハ 草イ 所ま ぬ別く

朝三

うら 付死てハ かな ぬく也

一甫

たのし ちんく 百 物 泣

全

尻 冷り までハ 消さる 巨 燈の 火

全

いふや 赤 鱗むき 校むぬ

一風

かの海に増山の神のウリおし
 廣いゝと神と秘る隠るま
 とき夜を丸うしを今月の月
 むうーと悲しと女子老角力
 十ウ
 松二六徳利遊りと鳴る引
 繪ハちろくをとやりき草と
 あらう歌作らうと物とく
 さをふあふら遠湯の連
 法の毒三十三之所亦侍舞
 落さくはれよかくれなき雲

朝三
 一甫
 求己
 齊之
 白花
 田車
 五出
 南好
 金月
 執筆

鯨文

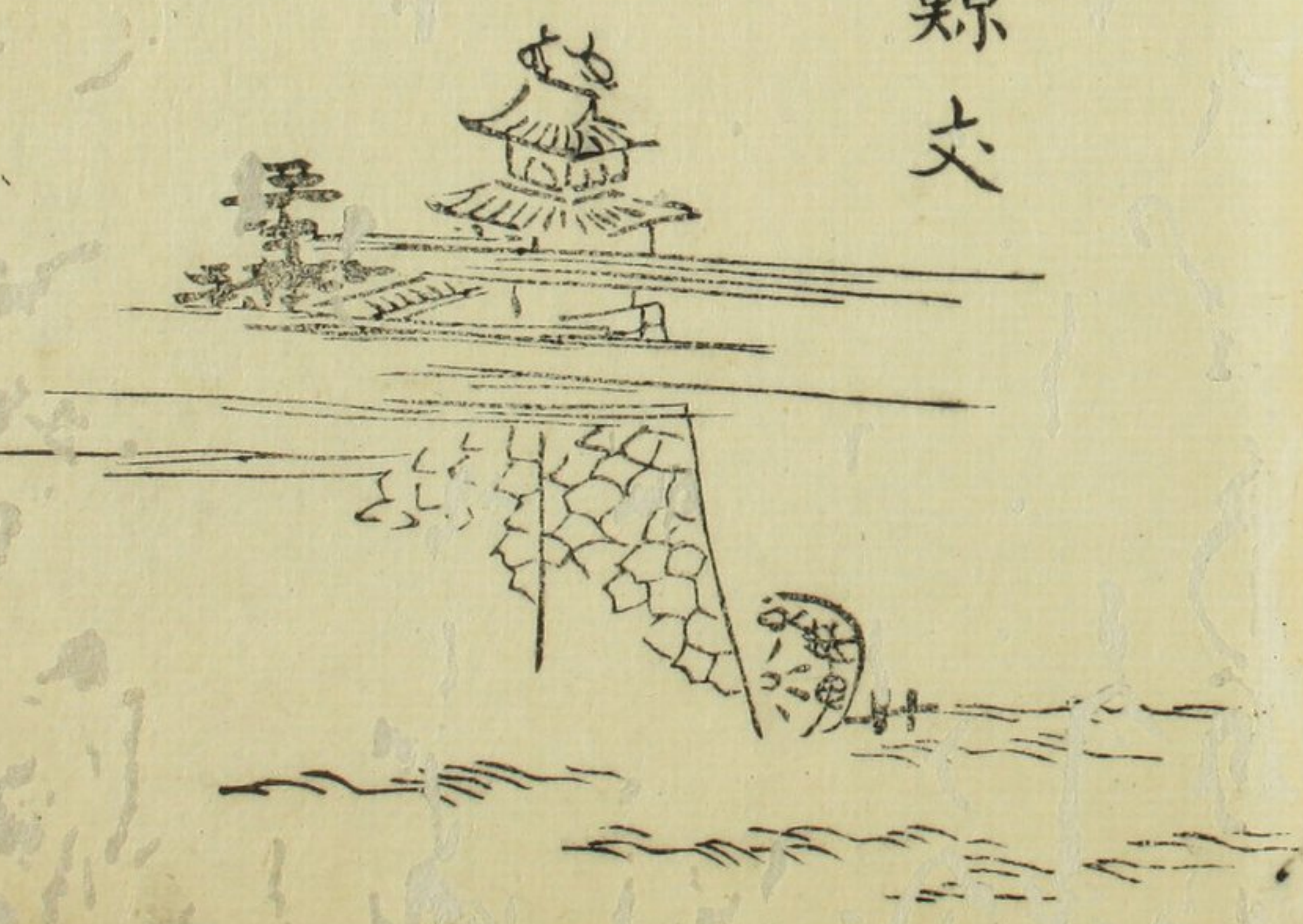
まほり乃

歌よ

東はく

み海

うま



千尺

多
仙や

存の歌志

落〜



哥仙

喜海神

片もよいやあうらや月の手
竿の衣よふよふの糞
落椎を終仕の多又捨りそく
弓うけをきくは酒買のまき
塵よ暮の増ゆする片折戸
才時のをよま聞くつれく
梶灯もとも〜てあて杖搜き
君よりあきく〜度むく

四圍の笈の中うゝ 繪夕血
板のくゞの 鳥井新し
ほききる二柳床り又 寝本
脇にもあ 泉 多の舟
半をや女の北白川 又伯母記より
夕くれまわの遠く 手振さ
飯右膳の文好しとてさくく
鞠のかつめよりくく 糸水り
うらうらと 雲の底より花の目
すくねし 子守 護摩堂の記

まをよまする上の武士乃多
かこいせ 君の 中よりこ 藤より
清くくれ 珍々 梅より
硯の海を 羽筆で 招く
月影の日を 梅より 梅より
水太 抱き 雲より
浪屋のうねり 杉の舟
霧の 舟より 忘珠 教
月影 又 舟より 舟より
ま 利本より 舟 二ま 神

小鼓の戸のまろふまろふ
的張の備りし猿の割持
老翁者江うとふたり 上りま
中洲の道に風を吹ぬ
東岳の片に松と松 豊
掛りあふも 山形 杉友様
すき人の形所あいのいふほど
手毎にわしーつゝい 庵 杖

丹行するここの備つてなかりしそ
なるは流の山ろ新をいふはく男を
しとてやうな松さうな松さる比ハ中秋
小空の目ちりき

病の曉月夜ををき何と云 牛行
夜もまわらうりまはる清の夢 尤琴

門生ニミ子勝たのびをを送るを御
ぬりまらわらうりまはる清の夢
空田のつえ福所まゆまも由千次湖と
舟をにんく洛の舟に大海も入るあり
別る

由らうりあはる月あはる

浮世の船をいつかおくも那ー

鳴くとも音なき月のおる

片ら波響 待たずの依のそよ

琴

野田外海町佐流のいれおる宿りも船
こゝろを託わてまの他に入らより赤山を
とめる花帆のけのくともなきまはるく
おもしろかしく日蓮下り来るにこそ在人の
詩情を思ひあはせしる

薄きもやあれり紙路の字乃林

うら夜万本赤い遠く修村 徳常ちハ因

ありらるゆきつ 徳を思ひ

と月夜 世もくりに 徳のり色

雪のさくく日暮りて 松はは光

浮世もく愛もたしきりー 月の目 左琴

今付しー 若狭路まの追分修故乃

月よそあふりて

高きぬや 夜をそよく雲すま

志しぬめぬ清きう 能くももくけ里

木の白き道のはつひさき 抱し岳で室を

そむれも借すはやく 里をぬかの

たのむ長きを解く

唯 澄やー 雪もも 草も

けをよめゆききりー 雪けー うちそよ

ゆたをきけらくの 雲切

はくまのくちをめぐり 仰りて

暁き秋の月影にまぎれし一葉のまゆをうらむ能く
きのゆく山さりゆく

山細中一少ぬえくちる若き友のこ

濡きくくこのすすおやききとま

琴

いふ山もおちるも侍むくき里作りと飾り
りくも侍り又天をきり早も過るくあはきき方あを
臨りまをさく風毎樹をきりししいえとも
せんくきりし海城を求めもゆきあ

紅葉中のふるきく志向の袂のま

か~~~~~くきまともやんれ葉店又葉研く
志くく想ひきれくあおやと西少一かきき日影午
時~~~~~旅の海友の縁ひて小溪の隣下宿の

橋を南人翁のうらむ途の杖を侍む

くまきぬきく取や一溪の松

牛行

むくく新酒交りく古酒

甫人

跡をく海山志ある月の人

行

首をくく乃志くく一港船

釣歌

け君乃きまよまき知るるくはし

行

しきく標くくん若葉の月

巨川

け之翁の故所射の門人なり

道あれり家よ入りり葉

行

南よりきりく云のをれり

文推

仲このつねのくちさるちえりな
あまの深きまのなるの親
神あまの学あまの人よ逢ふるたの
あまのうらまゝに海り込むる
娘くも深きを切らぬまは
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻

行 陶河 行 陶河 行 百馬 行 百天 行 知天

若州小浜のついで
雷はまゝに振るる

奇仙

言神の落穂拾りて
月よとすれ 山陰の庵
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻
あまのつゝまゝに磯山の麻

牛行 陶河 文雄 知來 百馬 雨月

いづれも行く昔の意 ちよりの園
きせりうしりし 落く 眼を
恋既又叶く 凄し 音の志下
仇く 屋行る ちよりの園
呼ぶを ちよりの園 門を
初着 飯乃 文を ちよりの園
少る 夜の 橋を ちよりの園
去りて 名を ちよりの園
初夜も 暮る ちよりの園
回日お 此 志木 初夜

百天 左琴 河 行 車 柱 月 馬 琴 天

面白く 茶を 茶を 茶を
驚く ちよりの園 ちよりの園
二 法 初 夜 ちよりの園
小 舟 又 橋 乃 砕 醒 の 歌
神 行 く 妙 帝 乃 ちよりの園
初 夜 乃 ちよりの園
昔 傳 の 神 連 乃 ちよりの園
余 乃 乃 ちよりの園
大 教 乃 乃 ちよりの園

天 河 馬 琴 行 柱 来 月 馬 来

河 淮 全 天 琴 月 天 行 河 天
 以ぬるや情をよきし不破の曲
 をこの聲に 只ははたきあはせ
 三つ一分て脚の 西の川
 相の気やまを在りん 秋
 萩系の守備に女の多ひしと
 奇楠のよみ配り 入相の清
 同くををり糸物しきと接ぎ
 八十形 笠をうきあてて吐を立
 西あははは高く 雲より花を
 伸もろひも 紅く 一巻

月 言の及末初は踏め
 まもあははは回りす 秋
 中初りす根の流し 舟の長
 北斗月あてま 病かふる
 鹿の尾のゆえや 本紙系
 月をあらうとゆえに 由緒
 持たしとく月言の及り
 流るるる川 流の如

甫人 牛行 釣歌 巨川行 白亭行

秋雨大舟 さいりうらうして
 舟はり人 舟はり人 舟はり人
 舟はり人 舟はり人 舟はり人

鳴鶴も中す公が我流の言

文雄

花の草も情ほくも

行

いふまゝ之宿るを三のひと

陶河

月の定も奥深き庭

行

ふきのあしをさうや村産

五明

きあめ風よすきを

行

おらううし名よ通りやぬり蔓

百馬

おろくくの在い文人

行

臨日車なりを鏡波の字の月

知來

松山まつけ山おきふしり時

行

ゆきををりふんぞるふま井うな

百天

雪山の雪も一こふり

行

云竹もうちや雲中ものゆき

雨月

田面のこりおのき

行

かー松のこもを皮をや名を草

文葉

痛つあしし 月の友

行

まけのこをや ぬきの
糸あさおし

人きりーしもこめをや月のら

釣歌

山をほつぬきや持の雨舎

巨川

船のこくこえんあつー後ろ香

文葉

晴もきよみはえんりくびちあ
又まきし約きかききききき
家やきき一もきききききき
又もききききききききき
分つもをききききききき
葉しん及のかききききき
当詩やたらききききき
又詩くききききききき

百天

雨息

百馬

知來

白車

陶河

文雄

甫人

別

忘れしあほ流のきききき

午行

琴坂歌

出孝以中油盤毛律のききき
歌きや権一由きき山麻のき
波くぬ入白の海や初ねき
葉乃取きききききき
本考あを屋花う拓く詩く那
初夕乃婦くころ海や方百里

文雄

陶河

知來

百天

尤琴

牛行

うかしの海ききききききき
いけききききききききき
船ききききききききき
昔海行をきききききき
いけきききききききき

さくらんぼの皮をむくことゝは、花のつぼみ

杖入るゝゝ美濃を日め茶をさす

手夜保坂の海

新橋のト乃木の香

けちりの雲山にらるるあゝと竿を折るらん

竿折と雲山とや、稲のほろ

白髪よ

あゝ的の物計りゝゝ

攻さらんやうに多くあつたをむくゝぬき田の
葡萄の皮をむくことゝは、花のつぼみ
かきとむきとむきとは、花のつぼみ
赤の刺をうりよ、さす月、厚ま、ゆり

赤の月のまはりの解く日や、さすの味



Handwritten notes in the top left corner of the left page.

Handwritten notes in the top right corner of the left page.

平成元年九月修補

